



社会福祉法人
北見市社会福祉協議会
北見市美山町
あかしや団地町内会

大雪に見舞われた
北見市に学ぶ
地域のあり方、
取り組み方



社会福祉法人
北見市社会福祉協議会
会長 田村 雪氏



北見市美山町
あかしや団地町内会
会長 中村嘉孝氏



まれにみる記録的な豪雪が北見地方を襲いました。台風なみに発達した低気圧の影響により、平成16年1月13日の夜から降り始めた雪は止むことを知らず16日まで延々と降り続け、総降雪量は北見市で125センチにも。地形などによりこれよりも多く降ったところもあると思われ、市民生活に大きなダメージを与えました。今回はこの大雪による災害に遭遇しながらも、さまざまな対応に尽力された社会福祉法人北見市社会福祉協議会の田村雪^{きよし}会長と、北見市美山町あかしや団地町内会の中村嘉孝^{たかよし}会長に、当時の状況や重点的に行ったこと、災害を経験して変わったこと、教訓を活かしてこれから取り組んでいきたい地域のあり方などをうかがいました。

社会的弱者への配慮を最優先し、
ボランティアも協力

80代になられても、まだまだ現役でご活躍の田村会長は「長いこと北見におりますが、初めてでしたね、あんな経験は。たまたま13日は用事で外出しておりましたが、自宅へ帰るにもズブズブと足が埋ってうまく前に進まず、一寸先見えない暴風雪。よくもまあ無事だったと思いますよ」と苦笑い。「驚きました」を何度も何度も繰り返し、あれから1年以上の時間が経っても、大雪の記憶が色濃く残っていることをうかがわせていました。

田村会長が所属する北見市社会福祉協議会では対応策としてすぐに対策本部を立ち上げ、まずFFストーブの換気口の確保に務めました。雪などで換気口が詰まると不完全燃焼による有害なガスが室内に入り込み、死をまねくおそれがあります。ひとり暮らしの高齢者や高齢者夫婦世帯、身体障害者世帯を中心に100件の家の換気口と避難路を確保しました。人工透析をしている人や診療、投薬などで医療機関にかからねばならない人もいて、これらについては市役所の担当の課へ橋渡し。屋根の雪下ろしなどについては業者を紹介しました。

一方の中村会長のところは、病弱な人や高齢者、女性世帯などを対象に数年前から、町内会で22名の町内会員による有償ボランティアの除雪協議会を組織しています。日頃の活動から、あれだけの雪が降ってもさほど慌てることはなかったそうです。メンバーは60～65歳が中心で、最高齢で75歳ぐらいの方も。ただし「大きな道路は行政によってすぐ除雪が入りましたが、市道になるとなかなか手がまわらず

1週間道が開かなかったのは本当に困りました」と振り返ります。

降雪後の相次ぐ トラブルに頭を抱えて

降り続く雪に窓も覆われ、時には停電にもなり精神的に不安を抱える人が沢山いたのは否めません。「社協事務所の電話がずっと鳴りっぱなしでした。「この雪はいつ止むんだ」「いつウチに除雪に来てくれるんだ」などさまざまな内容で、問い合わせがありました。こちらの状況等をお知らせすることにより不安を解消することに心がけました」と田村会長。協議会では大雪が落ち着いた17日から、2、3人の職員でチームを編成し、受け付け家庭をまわりました。北見工業大学の学生や市民たちが少しでも早く対象者に普通の生活を取り戻してもらおうと、除雪ボランティアにも参加したそうです。

町内会長ということもあり、中村さんのところにも朝の8時ぐらいから「買い物に行けないから、雪をどうにかしてほしい」というような電話が入りました。これについては要介護の方などあらかじめ優先順位を決め、回覧板などで知らせているので、どうしてすぐに行けないのか説得力のある対応ができたそうです。また雪が止んだ後のトラブルとして雪捨ての問題が発生し、路上駐車はもちろん、突然現われた「除雪屋」なる人たちの勝手な振る舞いにも頭を痛めたといいます。これは、夜中にやってきて頼まれた家の雪をほかの家の前に置いていくというもので、置いていかれた家の人はカンカン。同じ町内会に住みながら険悪なムードにも成りかねません。また、除排雪では、最初は1時間で戻り、その後、1時間半、2時間ペースになり、この状況では終わらないのではないかとということで、事前に道路課から公園を利用させていただきたいという文章が



来ておりましたことから、雪捨て場として公園（実は公園引当り地）に排雪をお願いいたしました。ところが担当する課からは駄目です。

理由は、以前に他地区で「若いお母さん達から子供達の遊具が壊れる」とのクレームがあったとこのことで中々許可がでず、夜間3～4回ほど交渉やり取りを致しまして、町内会で責任を持つからということで投げさせていただき一昼夜かけての作業で6日間ぶりに道が開きました。その状態に合わせて対処いただければもっと速やかに地域生活道路は開くのではないかと思います。

効率的な情報の伝達で ムダを省き、不安の払拭へ

こうした経験から田村会長は、「情報の収集と伝達方法が課題。わたしたちの対象者はインターネットを使う人も少ない高齢者の方が多く、停電になると電話も使用出来なくなるため、今回一番不安感を持たれたと思う。今は情報社会といわれていますが、このような人達に適切な方法で情報が伝わるシステムを考えなければいけないと思いました」と真剣な表情で話しました。

また「行政へむやみやたらと電話を掛けるのは混乱をまねくだけ。どこか窓口を一本化すれば、例えば除雪車があっちへ行ったり、こっちへ行ったりと住民の苦情に振り回されることなくムダも省けると思います。もちろん窓口が除雪車がどこに何時ぐらいに入るとか、天候が今後どうなるなど情報がしっかり得られる態勢であることも大切」と、今後のあり方を考える中村会長。北見市は来年合併を控え、ますますエリアも広がります。「市が網羅しなければならない範囲が増えるわけですから、自分たちの町内会でできることはできるだけ自分たちでやり、行政におんぶにだっこではなく自立を目指していきます。どうすれば自分たちの街が暮らしやすくなるのか住民共通の課題として投げかけ、将来起こかもしれない災害の時の対応も一緒に考えたいですね。ただし中心となって動くメンバーの高齢化が進み、もっと若い人にも町内会活動に参加してもらいたいんですが、なかなか…」という今の風潮も。

今回の大雪を通して、連携ネットワークを確立し情報の伝達をしっかりと行うことが不安を解消する上で重要であるということで、お二方の意見は一致しました。